

「実践して楽しんで、その先に感じるのが文化」

Nishiura Style ● 西浦喜八郎さんを囲んで

聞き手 ● 苧宿俊文（青山学院大学社会学部情報学部教授）

苧宿 今日は楽しみにしていました。なぜなら西浦さんは、自分にはない何かを持っている人だと感じているからです。Nishiura Styleという、お茶、お香、お花、書などの日本文化を楽しむ暮らし方を提唱・実践されている一方、全く無関係に思える地球物理学者でもあります。まずは、その辺の経緯をお聞きかせください。

西浦 西浦家は西浦焼の窯元としてだけでなく、商社として、明治期に財閥的發展をしました。戦争の影響で解体されましたが、家では美術品や骨董に囲まれていたわけです。私の父は美術品市場を営みつつ、私を週3日も美術館に連れ回し、「この作品は良い。これは悪いから見るな」と言うだけで、私が「何で？」と質問しようものなら、「そんな質問をすること自体がダメだ」と怒りました。そんな感じで、アートの囲まれた子供時代を過ごし、確かに目は養われましたが、私の中ではアートは嫌なものになってしまったのです。アートから逃げる意味もあって、地球物理学を学ぼうとアメリカに渡ったのです。

苧宿 そこからなぜ、またアートのな生き方に戻ってこられたのですか？

西浦 アメリカに渡って、友人がくれた絵



1970年生まれ。西浦焼を国内外に広めた西浦圃治の子孫で、古美術商・西浦渌水堂の4代目。オハイオ大学院地球物理学修士課程終了。茶、香、花、書などを楽しむNishiura Styleファンが国内外に増加中。

葉書の月光菩薩像を眺めていた時、「この菩薩は1000年もの間、暗い中にいる時も、老若男女いかなる人に対しても微笑みを与えて続けているんだ。自分でアメリカに来ると決めたのに寂しいなどと思っただめだなく」と感じた途端に涙があふれました。菩薩を作った人の孤独と寂しさを感じました。そして前へ進む気持ちを喚起してくれました。その時に「アートはこういう力も持つんだ。我が家のアートの携わる道も悪くない」と感じたのです。

苧宿 日本文化を教えるきっかけは？

西浦 お付き合いのあった花屋さんから「子供にお花を教えて」と頼まれたのが始まりですが、その後は自然な流れで、お茶やお香や書にも広がっていきました。うちには「道」をつけていませんで、流派を越えて親も参加できるんです。そのうち、児童館、百貨店、お寺、NPOなどから「うちでも教えてほしい」と言ってくれ、「アメリカにも来てほしい」と。大きな流派は決まり事が多く、素人がすぐ楽しめる段階にはいけません。うちは実践あるのみで、子供も外国人も楽しめるのです。

苧宿 みんな流れて向こうからやって来ます。他力本願ではないですけど、目の前

に現れることを受け止め受容する力。結果的にそれが人に役立つ形で表れるんだろうと感じますが、そういう生き方をするコツみたいなものはあるのですか？

西浦 アメリカで地震の研究をしていた時、大地に寝っころがって、鳥や木や風など自然の動きを観察しました。自然と一体になることで見えるものがあるからなんです。スマトラ沖大地震の津波で人間は何方人も逃げ遅れて亡くなったけど、象は高台に逃げて生き延びました。自然の一部になることで磨かれる感覚とかアンテナのようなものはあるかもしれませんね。

苧宿 生涯学習開発財団は、西浦さんが国際交流の中で実践的、ラボ的に日本文化を伝える意義を評価し、2015年度の助成金を授与しました。異文化交流において心がけている点がありますか？

西浦 相手がどこの国の人かは意識しません。異なる点よりも、例えば月を見て美しいと感じる共通点を重視します。子供に教えていると、彼らは正直ですから、つまらないとかわからないとかすぐ態度に出ます。この子たちに楽しんでもらうことができれば、もう誰でもコミュニケーションがとれると感じながらやっています。

苧宿 私たちは、目的を持って効率良く生きることには囚われがちです。西浦さんはそれとは対照的な生き方をしていると感じました。多くの方の生きるヒントになったのではないのでしょうか。

西浦 ありがとうございます。